

第3計;中国人は何故拝金主義者が多いのか？

—未来に不安があるかからです。—
拝金主義者には「杜子春」が参考になります
中国人大人は「拝金主義」、子供は「拝権主義」

“拝金主義”という言葉があります。私はこの言葉を中国と交流するまでは忘れておりました。そして、幼少の頃の童話本の中のあ
る部分を思い出した次第であります。

「ある国の国王はとても金好きであった。あるとき魔法使いに魔法をかけられ、国王が手で触るものすべてが金に変わるのでした。兵士をさわれば金になるのです。ある日最愛の王女にさわってしまい王女が金になった。さすがに国王は驚き、金の王女の側で泣いた」という話であります。

日本人と違って中国人はどの職業についているのではなく、儲かる仕事であればなんでもよいという価値観があります。特に中国女性の先見性のない刹那（せつな）主義には驚かされます。そして、男性の計画性（短期・中期・長期）のないのも吃驚します。実績もないのにどんなビジネスにも手を出そうとするのです。最近、上海の書店で中国のファッション雑誌に掲載された“拝金主義の女性をどう愛するか？”のタイトルを発見しました。

私が感じるのは、「日本では男性が社長で女性が経理部長であるが、中国では女性が社長で男性が専務なり工場長の会社をよく見かけるので、中国女性は愛があって努力の成果としてお金がついてくるのではなく、お金が先で愛がお金に続くという女性が多い」ということです。

日本の50歳を超えた男性には興味本位で中国女性と交際する人も確かに存在すると思われまふ。しかし、日本の若者の大半と、武士道精神をもった老人（60歳以上）にはそういう形の中国人女性との交際を否定するのではないでしょうか。

「拝金主義の女性でもよい」と思っている日本人男性は、45歳～55歳に多く、夫婦が別居・離婚している場合に時々見かけるのです。日本の若者の大半は新しい家庭を築き守る為、極力交際費を少なくして生活しています。一方、武士道精神をもった老人（60歳以上）は、本当につくしてくれた女性には、自分が「別れたい」という場合、結果責任として、手切れ金数百万を支払って別れます。手切れ金は“過去への感謝の気持ちとしての退職金”であり円満な別れを目指す為の必要経費であります。因みに先に女性が「別れたい」と言った場合には、寸志（少額のお金）を支払う程度で済ますこともあります。武士道精神をもった日本人の男性は別れる時でも礼儀作法を弁（わきま）えているのであります。

また前述の俯瞰（ふかん）的概念で考えると、ここには日本の男性と中国の男性に於ける“価値観の共有部分”があるものと思慮されます。日本人では、“お金が先で愛が後の女性”は大抵夜の仕事をしていますし、昼の仕事の女性にはあまりお目にかかった記憶がございません。

「金銭が目的の結婚は金銭で破たんする」という意見もあれば、それに反論する意見もあることは重々承知しております。いずれにせよ、お金がなければ生活が出来ないのは事実であります。

私が「中国人は拝金主義」というのは、ある程度生活できるのにもかかわらず、「まだそれ以上に求める心境はなにか？」という疑問から始まりました。そして、“将来に対する生活不安”がそうさせているという結論に至ったのであります。私は若い人（男性であれ、女性であれ）と交流する場合には私が先に死ぬので、私が死んだ後も知り合った人達の幸福を願って“布石”（お金か？、株式か？、事業機会を与えるか？、私の人脈紹介か？・・・）として「どの布石が良いか」を考えるタイプの老人です。当人には「布石が何であるか」は言わないことにしています。先に話をすると相手に過度な期待を持たしてしまい、相手がせっかく持っている“潜在能力”を潰（つぶ）してしまうからであります。

ところで、中国の都会の拝金主義と田舎の拝金主義は違います。田舎に住む中国人にとって、“病院治療費が収入に比べ高すぎる”そして、“治療費の安い

病院は検査システムがなく誤診が多い”という事態をご存知でしょうか。ですから、手術となると大変なのです。少し極端に思われるかも知れませんが、若い女性は、身を売るしか家族救済の道がないのであります。

拝金主義者が参考にすべき本は芥川龍之介の「杜子春」と思います

芥川龍之介（1892年 - 1927年）の名作「杜子春」は大正時代、「赤い鳥」に童話として発表された作品です。芥川龍之介は中国語が出来きました。

同作品は、中国の伝奇「杜子春伝」を骨子として書き上げたと言われています。人間の七情（喜・怒・哀・懼（おそれ）・悪・欲・愛）のうち、愛の執着が最も強いということを語ろうとしました。

杜子春 作者；芥川龍之介	杜子春 作者：芥川龙之介
<p>1 或春の日暮です。唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がいました。若者の名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費（つか）ひ尽（つく）して、その日の暮しにも困る位、憐（あわれ）な身分になつてゐるのです。</p> <p>何しろその頃洛陽といへば、天下に並ぶもののない、繁昌を極めた都ですから、往来（おうらい）にはまだしつきりなく、人や車が通つてゐました。門一ぱいに当つてゐる、油のやうな夕日の光の中に、老人のかぶつた紗（しゃ）の帽子や、土耳其（トルコ）の女の金の耳環や、白馬に飾つた色糸の手綱（たづな）が、絶えず流れて行く容子（ようす）は、まるで画のやうな美しさです。</p> <p>しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭（もた）せて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。空には、もう細い月が、うらうらと靡（なび）いた霞の中に、まるで爪の痕（あと）かと思ふ程、かすかに白く浮んでゐるのです。</p> <p>「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行つても、泊めてくれる所はなささうだし——こんな思ひをして生きてゐる位なら、一そ川</p>	<p>1 某年春天黄昏。唐朝京城洛阳西门下，有个年轻人心不在焉地仰望著天空。</p> <p>年轻人名叫杜子春，本来是富家弟子，现在因荡尽家财，沦落成过一天算一天的落魄汉。</p> <p>当时的洛阳，极为昌盛，是个天下无可匹比的京畿，大道上车水马龙，人潮熙来攘往。</p> <p>在如亮油般照映在西门上的夕阳光辉中，可见老人的罗沙帽、土耳其女人的金耳环、装饰在白马上彩丝羈绳，都在不断流动，那景象美得像一幅画。</p> <p>但是，杜子春依然将身子靠在西门墙壁上，心不在焉地眺望著天空。天空上，细长的月亮，宛如指甲痕迹，幽白地浮睡在缭绕的雾霭中。</p> <p>“天暗了，肚子也饿了，而且不管到哪里，大概都找不到今晚能容身的地方了……与其这样活著，</p>

<p>へでも身を投げて、死んでしまった方がましかも知れない。」</p> <p>杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思ひめぐらしてゐたのです。</p> <p>するとどこからやつて来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇(すがめ)の老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、ちつと杜子春の顔を見ながら、</p> <p>「お前は何を考へてゐるのだ。」と、横柄に言葉をかけました。</p> <p>「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」</p> <p>老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思はず正直な答をしました。</p> <p>「さうか。それは可哀さうだな。」</p> <p>老人は暫く何事か考へてゐるやうでしたが、やがて、往来にさしてゐる夕日の光を指さしながら、</p> <p>「ではおれが好いことを一つ教へてやらう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」</p> <p>「ほんたうですか。」</p> <p>杜子春は驚いて、伏せてゐた眼を挙げました。所が更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりも猶(なお)白くなつて、休まない往来の人通りの上には、もう気の早い蝙蝠(こうもり)が二三匹ひらひら舞つてゐました。</p> <p>2 杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人といふ大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。</p>	<p>不如乾脆跳河自杀要快活点吧。”</p> <p>杜子春从刚刚起就一直如此漫无边际地思索著。</p> <p>然后有个不知从何处冒出来的独眼老人，停顿在他面前。</p> <p>他沐浴著夕阳余辉，将长长的影子刻印在门上，一直凝视著杜子春的脸</p> <p>“你在想什么？”老人趾高气扬地问。</p> <p>“我吗？我在想，今晚没地方睡，不知该怎么办。”</p> <p>由於老人问得很唐突，杜子春不禁俯下眼皮，率直地回答。</p> <p>“原来如此。那太可怜了。”</p> <p>老人思考了一阵子，</p> <p>然后伸手指著映射在大道上的夕阳余辉道：</p> <p>“那么我告诉你一件好事。如果你现在站在夕阳中发现地上能照映出你的影子，今晚半夜时就挖挖你影子的头部地方。一定会有满车的黄金埋在那里的。”</p> <p>“真的？”</p> <p>杜子春听后大吃一惊，扬起一直俯下著的眼皮。不可思议的是，那老人已不知去向，周遭也不见他的影子。</p> <p>只是，挂在上空的月亮比先前更皓洁，往来不息的行人道上，</p> <p>已有两三只性急的蝙蝠在翩翩飞舞著。</p> <p>2 杜子春在一夜之间，化身为洛阳独一无二的大富翁。因为他真得听从那老人的话，於夜半悄悄挖掘夕阳映照出的影子头部，挖出了一堆比一辆大车更多的黄金。</p>
--	--

大金持になつた杜子春は、すぐに立派な家を買つて、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮らしを始めました。蘭陵(らんりょう)の酒を買はせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせるやら、日に四度色の変る牡丹を庭に植ゑさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼ひにするやら、玉を集めるやら、錦を縫はせるやら、香木(こうぼく)の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂(あつら)へるやら、その贅沢を一々書いてゐては、いつになつてもこの話がおしまひにならない位です。

するとかういふ噂(うわさ)を聞いて、今までは路で行き合つても、挨拶さへしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやつて来ました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には尽されません。極(ごく)かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲んで、天竺(てんぢく)生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれてみると、そのまはりには二十人の女たちが、十人は翡翠(ひすい)の蓮の花を、十人は瑪瑙(めのう)の牡丹の花を、いづれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏してゐるといふ景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家(ぜいたくや)の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。さうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになつて見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸さうといふ家は、一軒もなくなつてしまひました。いや、宿を貸す所か、

变成暴发户的杜子春，马上买了一栋豪华的房屋，开始过著不比玄宗皇帝逊色的奢侈生活。

买兰陵的美酒啦、桂州的龙眼啦、在庭院内栽植

日易四色的牡丹啦、

饲养几只白孔雀啦、

收集宝玉啦、剪裁锦绣啦、制造香木的车子啦、

订制象牙椅子啦、

若要详细述说他的奢侈，

那这个故事是永远都无法结束的。

一些平日在路上遇见也形同陌路人的朋友们，在听闻杜子春致富的消息后，不管朝晚都来找杜子春玩了。而且人数日渐增多，

半年过后，所有

洛阳闻名的才子与美女，

几乎没有一个不是杜子春的座上客。

杜子春每天陪著这些客人举行盛宴，

而且酒宴盛大得无可比拟。

随便举个例子来说，

当杜子春在金杯斟满来自西洋的葡萄酒，出神观看著印度魔术师表演吞刀特技时，他身边就环绕著有二十个女人，

其中十个在发上插饰著翡翠莲花，

十个在发上插饰著玛瑙牡丹花，

吹弹著曲调轻快的笛歌与古筝。

只是，再如何富有的大富翁，金钱总是有止境的，奢华如杜子春者，

一年两年过去后，也逐渐开始捉襟见肘起来。等他把钱用尽后，才了解人心的薄情寡义，直至昨天还天天来报到的人，今天路过门前竟也懒得进来打声招呼了。

到了第三年春天，当杜子春又恢复成一文不名的穷小子时，广阔的洛阳，

竟找不到一家肯让他借宿过夜的人家。别说是借宿，甚至连施舍一杯水的人家都找不到。

<p>今では椀に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。</p> <p>そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立つてみました。するとやはり昔のやうに、片目眇（すがめ）の老人が、どこからか姿を現して、</p> <p>「お前は何を考へてゐるのだ。」と、声をかけるではありませんか。</p> <p>杜子春は老人の顔を見ると、恥しさうに下を向いた儘（まま）、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切さうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じやうに、</p> <p>「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」と、恐る恐る返事をしました。</p> <p>「さうか。それは可哀さうだな、ではおれが好きなことを一つ教へてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」</p> <p>老人はかう言つたと思ふと、今度も亦（また）人ごみの中へ、掻き消すやうに隠れてしまひました。</p> <p>杜子春はその翌日から、忽（たちま）ちち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題（しほうだい）な贅沢をし始めました。庭に咲いてゐる牡丹の花、その中に眠つてゐる白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてが昔の通りなのです。</p> <p>ですから車に一ぱいあつた、あの夥（おびただ）しい黄金も、又三年ばかり経（た）つ内には、すっかりなくなつてしまひました。</p> <p>3 「お前は何を考へてゐるのだ。」</p> <p>片目眇の老人は、三度杜子春の前へ来て、同</p>	<p>於是，某日黄昏，杜子春再度逛到洛阳西门下，呆然地眺望著天空，不知何去何从。</p> <p>然后那个独眼老人也跟往昔一般，不知从何处又现身出来。</p> <p>“你在想什么？”</p> <p>杜子春一看到老人，即惭愧地低下头，说不出话来。</p> <p>只是，老人这天也亲切地反覆问了同样的话，他只好又一次诚惶诚恐地答道：</p> <p>“因为我今天没地方可睡，不知该怎么办？”</p> <p>“原来如此，那太可怜了。那么我告诉你一个好办法。现在你站到夕阳下，若你的影子映照在地上，你便趁著夜间挖掘影子胸部的地方，那里一定埋藏有满车子的黄金。”</p> <p>老人说完，又瞬间消失在人潮中。</p> <p>翌日，杜子春又於一夜之间变成洛阳独一无二的大富翁。</p> <p>同时也开始过他为所欲为的奢华日子。种植在庭院的牡丹花、沉睡在牡丹花中的白孔雀、来自印度会表演吞刀的魔术师……一切如从往昔。</p> <p>因此他挖掘出的那些满车数不尽的黄金，经过三年后，便荡然无存了。</p> <p>3 “你在想什么？”</p> <p>独眼老人第三次来到杜子春面前，又向他发出</p>
--	--

じことを問ひかけました。勿論彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破つてゐる三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇（たたず）んでゐたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つてゐるのです。」

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを教へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その腹に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの——」

老人がここまで言ひかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮る（さえぎ）りました。

「いや、お金はもう入らないのです。」

「金はもう入らない？ ははあ、では贅沢（ぜいたく）をするにはとうとう飽きてしまつたと見えるな。」

老人は審（いぶか）しさうな眼つきをしながら、ぢつと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛想がつきたのです。」

杜子春は不平さうな顔をしながら、突慳（つげん）にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辞も追従（ついしょう）もしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔（やさ）しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな気がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑ひ出しました。

「さうか。いや、お前は若い者に似合はず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか。」

杜子春はちよいとためらひました。が、すぐに思ひ切つた眼を挙げると、訴へるやうに老人

同様の問話。此時の杜子春、当然又是呆呆伫立（たつ）在西门下，

眺望著幽幽穿射晚霞的月牙。

“我吗？我今晚没地方可睡，正在想著该怎么办？”

“原来如此，那真是可怜。那么我告诉你一个好办法。现在你站到夕阳下，

若你的影子映照在地上，你便趁著夜间挖掘影子肚子的地方，那一定埋藏有满车子的……”

“不，我不要钱了。”

“不要钱了？哈哈，那么你已经厌倦奢华日子了？”老人以诧异的眼神，凝视著杜子春。

“不，我不是厌倦了奢华日子，而是厌烦了人这个东西。”

杜子春现出愤怒的神色，冷淡地回答。

“有趣！有趣！你为什么厌烦起人了？”

“人都是薄情寡意的。当我是个富豪时，他们拼命奉承、阿谀，一旦变得贫穷，连个笑脸都不肯赏。

想到这点，即使再度变成富豪，又有何用呢？”

老人听杜子春如此说，忽然嘻嘻笑了起来。

“原来如此。没想到你这么年轻，竟然懂得这些道理。那么，你今后是想安然过著贫穷的生活了？”

杜子春踌躇了一会儿。不过，马上断然抬起眼睛，申诉似地望著老人。

の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子になつて、仙術の修業をしたいと思ふのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道德の高い仙人でせう。仙人でなければ、一夜の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教へて下さい。」

老人は眉をひそめた儘、暫くは黙つて、何か考へてゐるやうでしたが、やがて又につこり笑ひながら、

「いかにもおれは峨眉山（がびさん）に棲（す）んでゐる、鉄冠子（てつくわんし）といふ仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さうだつたから、二度まで大金持にしてやつたのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやらう。」と、快く願を容（い）れてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠子に御時宜（おじぎ）をしました。

「いや、さう御礼などは言つて貰ふまい。いくらおれの弟子にした所で、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第できまることだからな。——が、兎も角もまづおれと一しよに、峨眉山の奥へ来て見るが好い。おお、幸（さいわい）、ここに竹杖が一本落ちてゐる。では早速これへ乗つて、一飛びに空を渡るとしよう。」

鉄冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、口の中に呪文を唱へながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るやうに跨（また）りました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽（たちま）ち竜のやうに、勢よく大空へ舞ひ上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は胆（きも）をつぶしながら、恐る恐る

“我现在已无法再过贫穷生活了，所以我想做您的徒弟，修行仙术。

您不用隐瞒了，您是个道高德隆的神仙吧！

如果不是神仙，您绝对不可能让我在一夜之间变成天下第一的富豪的。

请您当我的师傅，传授那不可思议的仙术给我吧！”

老人蹙著眉，像在考虑什么似地，然后莞尔笑著。

“不错，我叫铁冠子，是住在峨嵋山的仙人。

最初看到你时，觉得你是个懂道理的人，

所以才两次让你成为大富翁。

如果你真渴望做仙人，我就收你为徒弟好了。”

杜子春当然喜出望外。老人话未说完，即匍匐在地上，

向铁冠子叩了几个响头。

“你不用那么道谢。虽然我收你为徒弟，但你能否成为出色的仙人，还在于你自己……总之，你先跟我到峨嵋山深处来再说吧。哦，恰好地上有一根竹杖，咱们现在就骑著这根竹杖飞越天空吧。”

铁冠子拾起地上那根青竹，

口里念著咒文，和杜子春一起

如骑马般跨上那根青竹。

结果真是不可思议，

竹杖立即像一条飞龙般，猛烈地冲上天空，翱翔在晴朗的春日夕阳中，一路往峨嵋山方向飞去。

杜子春心惊胆战，畏缩地俯瞰著脚下。

下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、(とうに霞に紛れたのでせう。)どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢(びん)の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱ひ出しました。

朝(あした)に北海に遊び、暮には蒼梧(そうご)袖裏(しうり)の青蛇(せいだ)、胆気粗(たんきそ)なり。

三たび嶽陽(がくよう)に入れども、人識らず。朗吟して、飛過(ひくわ)す洞庭湖。

4 二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞ひ下りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光つてみました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やつと耳にはひるものは、後の絶壁に生えてゐる、曲りくねつた一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西王母(しおうぼ)に御眼にかかつて来るから、お前はその間ここに坐つて、おれの帰るのを待つてゐるが好い。多分おれがなくなると、いろいろな魔性(ましよう)が現れて、お前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙つてゐるのだぞ。」と言ひました。

「大丈夫です。決して声などは出しはしません。命がなくなつても、黙つてみます。」

「さうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行つて来るから。」

只见青色的山峦隐藏在夕阳余辉中，那个洛阳西门

(大概早已堙没在晚霞了)，已无影无踪了。一会儿，铁冠子让风吹拂著苍白的鬢发，引吭高歌起来。

朝游北海暮苍梧袖里青蛇胆气粗

三入岳阳人不识郎吟飞过洞庭湖

4 载著两人的青竹，不久飘落在峨眉山。

青竹落在这一块俯临深谷的广阔岩石上，可能高度甚高，悬挂在半空中的北斗星，看起来竟有饭碗般大小，正闪烁著光芒。

本来就是人迹罕见的深山，周遭当然静寂无声。唯一幽幽飘入耳里的，是弯弯曲曲生长在岩后悬崖上的一株松树，随著夜风晃动枝叶的沙沙响声。

两人来到岩石上后，铁冠子让杜子春坐在悬崖下，对他说：

“我要上天去拜谒王母，你就坐在这儿等我回来。我不在时，

可能会有各种妖怪出现要诱骗你，不过，不管发生什么事，你绝对不能开口说话，

只要你开口说一句话，你便不能变成仙人。懂吗？总之不管再如何天崩地裂，你都得保持沉默。”

“您放心，我绝对不会出声。即使要我的命，我也会保持沉默的。”

“是吗？听你这样说，我就放心了。好，我走了。”

<p>老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨(またが)つて、夜目にも削つたやうな山々の空へ、一文字に消えてしまひました。</p> <p>杜子春はたった一人、岩の上に坐つた儘、静に星を眺めてゐました。すると彼は(かれこれ)半時ばかり経つて、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透(とお)り出した頃、突然空中に声があつて、</p> <p>「そこにあるのは何者だ。」と叱りつけるではありませんか。</p> <p>しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしずにゐました。</p> <p>所が又暫くすると、やはり同じ声が響いて、「返事をしないと立ち所に、命はないものと覚悟しろ。」と、いかめしく嚇(おど)しつけるのです。</p> <p>杜子春は勿論黙つてゐました。</p> <p>と、どこから登つて来たか、爛々(らんらん)と眼を光らせた虎が一匹、忽然(こつぜん)と岩の上に躍り上つて、杜子春の姿を睨みながら、一声高ほ哮(たけ)りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思ふと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇(はくだ)が一匹、炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。</p> <p>杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐つてゐました。</p> <p>虎と蛇とは、一つ餌食を狙つて、互に隙でも窺(うかが)ふのか、暫くは睨合ひの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が、虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬(またた)く内に、なくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしてゐるばかりなのです。杜子春はほつと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待</p>	<p>老人跟杜子春告别后，又跨上竹杖，飞向在夜里也能看得出陡峭山峦的上空，笔直消失了。</p> <p>杜子春独自坐在岩石上，静静地眺望著星空。约莫过了半小时，</p> <p>深山的夜气凉飕飕穿透单薄衣服时，突然上空传来叱骂的声音。</p> <p>“谁在那里？”</p> <p>不过，杜子春遵从仙人的关照，不开口回答。</p> <p>岂知，不一会儿，又响起同样的声音。</p> <p>“不回答的话，立即要你的命！”那个声音严厉地恐吓著。</p> <p>杜子春当然还是沉默著。</p> <p>刹时，一只不知从何处攀上的老虎，眼光炯炯地跳跃到岩石上，</p> <p>对著杜子春怒目而视，</p> <p>仰头咆哮了一声。不但如此，</p> <p>头上的松枝也同时激烈地左右摇晃，</p> <p>后面悬崖顶上，</p> <p>又出现一条四斗大的白蛇，伸吐著火焰般的红舌，一步步逼近来了。</p> <p>但，杜子春依然稳如泰山地端坐著。</p> <p>老虎和蛇，如抢食一个食饵般，彼此窥视，对峙著一会儿。然后，几乎是同时扑上杜子春。</p> <p>就在杜子春不知会被老虎牙撕裂，或被白蛇吞咽，</p> <p>小命即将呜呼哀哉时，老虎和白蛇竟如烟雾一般，随著夜风消失了。之后，只见悬崖上的松树仍和先前一样，摇晃著树枝沙沙作响。</p> <p>杜子春舒了一口气，暗中期盼著再度将会发生的事。</p>
--	---

ちに待つてみました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のやうな黒雲が一面にあたりをとぎすや否や、うす紫の稲妻がやにはに闇を二つに裂いて、凄じく雷（らい）が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑（たき）のやうな雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐つてみました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、——暫くはさすがの峨眉山（がびさん）も、覆（くつがえ）るかと思ふ位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟（とどろ）いたと思ふと、空に渦卷いた黒雲の中から、まつ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思はず耳を抑へて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳（そび）えた山山の上にも、茶碗程の北斗の星が、やはりきらきら輝いてゐます。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じやうに、鉄冠子（てつかわんし）の留守をつけこんだ、魔性の悪戯（いたづら）に違ひありません。杜子春は漸（ようや）く安心して、額の冷汗を拭ひながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐つてゐる前へ、金の鎧（よろい）を着下（きくだ）した、身の丈三丈もあらうといふ、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉（みつまた）の戟（ほこ）を持つてゐましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼をいからせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉山といふ山は、天地開闢（かいびやく）の昔から、おれが住居（すまい）をしてゐる所だぞ。それも憚（はばか）らずたつた一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が

这时，一阵风吹起，如黑墨般的乌云笼罩上空，淡紫色的闪电冷不防撕裂暗夜，雷声隆隆作响。

不，不只是雷声，瀑布般的豪雨也同时猛然哗哗倾泻下来。

杜子春在这种天崩地裂的处境中，依然面无惧色地端然坐著。

风声、飞溅的雨滴、无休无止的闪电光……峨眉山一时似乎将倾覆了。

然后突然响起一阵震耳欲聋的霹雳声，只见一道深红的火柱，从上空的乌云漩涡中笔直落在杜子春的头。

杜子春不觉堵住耳朵，匍伏在岩石上。但他随即睁开眼睛，发现天空依然晴朗，饭碗大的北斗星，也依然耸峙在前方的山峦上，

闪闪发光著。看来，

方才的暴风雨，

老虎和白蛇，都是些趁铁冠子不在时出来作祟的妖怪罢了。想通后，

杜子春这才放心地揩去额上的冷汗，

再坐正在岩石上。

只是，就在他嘘声尚未吐完，

一个身穿金铠甲、

身高足有三丈、

神态肃穆的神将又出现在他面前。神将手持三叉利戟，

不容分说就将戟尖指向杜子春的胸膛，怒目瞪眼地叱骂著：

“喂！你到底是谁？这个峨眉山从天地开辟以来，即是我居住的地方。

你竟胆敢独自跑到这里，看来你一定不是个普通人物，

<p>惜しかつたら、一刻も早く返答しろ。」と言ふのです。</p> <p>しかし杜子春は老人の言葉通り、黙燃（もくねん）と口を噤む（つぐ）んでみました。</p> <p>「返事をしないか。——しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属（けんぞく）たちが、その方をずたずたに斬つてしまふぞ。」</p> <p>神将は戟（ほこ）を高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満（みちみ）ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしてゐるのです。</p> <p>この景色を見た杜子春は、思はずあつと叫びさうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思ひ出して、一生懸命に黙つてゐました。神将は彼が恐れないのを見ると、怒つたの怒らないのではありません。</p> <p>「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ。」</p> <p>神将はかう喚（わめ）くが早いか、三叉（みつまた）の戟（ほこ）を閃（ひらめ）かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。さうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑ひながら、どこともなく消えてしまひました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のやうに消え失せた後だつたのです。</p> <p>北斗の星は又寒さうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らせてゐます。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向（あおむ）けにそこへ倒れてゐました。</p> <p>5 杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れてゐましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。</p>	<p>若不想死，赶快说明原由。”</p> <p>不过，杜子春仍是遵照老人的话，缄口不语。</p> <p>“不答话……是吧。好，不想答就不答，随你便。可是你要知道我那些众小喽罗是会把你能剁成肉酱的。”</p> <p>神将高举三叉戟，向对面的山峦上空呼唤。刹时，黑暗的夜空裂成两半，无数的神兵如乌云般布满天空，而且手上都闪耀著枪刀，好像即将要嘶杀过来般。</p> <p>杜子春眼见这个景象，情不自禁想叫出声，但又想起铁冠子的话，只好拼命紧抿著嘴。</p> <p>神将看他纹风不动，大发雷霆。</p> <p>“你这个顽固的家伙！再不答话，真要你的命了！”</p> <p>神将说时迟那时快，三叉戟一闪，即一刺戳死了杜子春。然后发出连峨眉山都会摇摇欲坠的朗笑，消失无踪。当然，那些无数的神兵，也随著响彻四周的夜风声，如梦一般消失无踪了。</p> <p>北斗星又冷森森地映照在岩石上。悬崖上的松树依然摇晃著树枝沙沙作响。但，杜子春早已气绝地仰躺在地上。</p> <p>5 杜子春的身躯虽仰躺在岩石上，可是，他的灵魂却静静地脱离了躯体，降落到地狱底层了。</p>
---	--

この世と地獄との間には、闇穴道（あんけつどう）といふ道があつて、そこは年中暗い空に、氷のやうな冷たい風がびゅうびゅう吹き荒（すき）んでゐるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯（ただ）木の葉のやうに、空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿（しんらでん）といふ額の懸つた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまはりを取り捲いて、階（きざはし）の前へ引き据ゑました。階の上には一人の王様が、まつ黒な袍（きもの）に金の冠（かんむり）をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでゐます。これは兼ねて噂（うわさ）に聞いた、閻魔（えんま）大王に違ひありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪（ひざまづ）いてゐました。

「こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐つてゐた？」

閻魔大王の聲は雷のやうに、階の上から響きました。杜子春は早速その間に答へようとしたのですが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな。」といふ鉄冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れた儘、唾（おし）のやうに黙つてゐました。すると閻魔大王は、持つてゐた鉄の笏（しゃく）を挙げて、顔中の髭（ひげ）を逆立てながら、

「その方はここをどこだと思ふ？ 速（すみやか）に返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責（かしゃく）に遇（あ）はせてくれるぞ。」と、威丈高（いたけだか）に罵（ののし）りました。

が、杜子春は相変らず唇（くちびる）一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言ひつけると、鬼どもは一度に畏（かしこ）つて、忽ち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞ひ上りまし

这个世界与地狱之间，有一条叫做暗穴道的路，那里终年都处于黑暗中，四周刮啸著冰雪一般冷冽的烈风。

杜子春如同一片树叶，在烈风中飘飘荡荡，最后飘到一座挂著“森罗殿”横匾的巍峨殿宇。

殿堂前一群鬼喽罗，一见到杜子春，赶忙围住他，把他押到台阶之前。台阶上有个身穿深黑色衣袍、头戴著金王冠的阎罗王，威武地睥睨著四周。杜子春心想，这大概就是那个众所皆知的阎罗王，再想到不知将会遭遇些什么事，只好战战兢兢地跪下来。

“小子，你为什么坐在峨嵋山上？”

阎罗王的声音如雷声般，自台阶上传下来。杜子春本想马上开口回答，但又想起“绝对不能开口”这句铁冠子的诫语，

只好又低垂著头，哑巴一般缄默著。阎罗王扬起手中的铁笏，倒竖著脸上的胡须，盛气凌人地怒吼：

“你以为此处是什么地方？快快回答，否则，我就让你立即尝尝地狱的苦刑。”

可是，杜子春依然紧抿著嘴。阎罗王见状，转头向众喽罗们粗声厉气吩咐了什么。

众喽罗们站直身子，再一把抓起杜子春，飞往森罗殿的上空。

た。

地獄には誰でも知つてゐる通り、劍（つるぎ）の山や血の池の外にも、焦熱（しょうねつ）地獄といふ焰の谷や極寒（ごっかん）地獄といふ氷の海が、真暗な空の下に並んでゐます。鬼どもはさういふ地獄の中へ、代る代る杜子春を抛（ほ）りこみました。ですから杜子春は無残にも、劍に胸を貫かれるやら、焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵（きね）に撞（つ）かれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸はれるやら、熊鷹に眼を食はれるやら、——その苦しみを数へ立ててゐては、到底際限がない位、あらゆる責苦（せめく）に遇はされたのです。それでも杜子春は我慢強く、ぢつと歯を食ひしばつた儘、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返つてしまつたのでせう。もう一度夜のやうな空を飛んで、森羅殿の前へ帰つて来ると、さつきの通り杜子春を階（きざはし）の下に引き据ゑながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言ふ気色（けしき）がございません。」と、口を揃へて言上（ごんじょう）しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れてゐましたが、やがて何か思ひついたと見えて、
「この男の父母（ちちはは）は、畜生道に落ちてゐる筈だから、早速ここへ引き立てて来い。」と、一匹の鬼に云ひつけました。

鬼は忽ち風に乗つて、地獄の空へ舞ひ上りました。と思ふと、又星が流れるやうに、二匹の獣を駆り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといへばそれは二匹とも、形は見すばらしい痩せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

正如众所皆知一样，地狱里除了刀山与血池外，还有火焰之谷的焦热地狱和冰海的极寒地狱，

并排在黝黑的天空下。

众喽罗们将杜子春一次又一次地抛往种种地狱里。

可憐的杜子春，不但被劍刺穿胸膛、

被火焰燒焦臉頰、

被拔掉舌頭、被剝掉皮、被鐵杵搗錘、

被放在油鍋里炸、

被毒蛇吞噬腦漿、被雄鷹啄食雙眼……

若要一一數說他所遭受的痛苦，

那真是不勝枚舉，總之，他遭受了所有的痛苦。

儘管如此，杜子春依然倔強地咬緊牙根，緊抿著嘴不說一句話。

這使眾喽羅們目瞪口呆，啞口無言。於是又一次挾持著杜子春飛過暗夜般的天空，

來到森羅殿之前，再把杜子春拖拉到台階下，向殿堂上的閻羅王齊聲奏道：

“这个罪人，无论如何都不肯说话。”

閻羅王皺著眉思索片刻，然後靈機一動，吩咐道：

“这个男子的父母一定被判下了畜牲道，你们马上把他们押到这里来。”

众喽罗们顿时乘风飞往地狱的上空，

然后再如流星般驱赶著两匹兽，

降落到森罗殿前。

杜子春看到这两匹兽，大吃一惊。

因为那虽说是

两匹形影寒怆的瘦马，

脸孔却是连做梦也忘不了的双亲容貌。

<p>「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐つてみたか、まつすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思ひをさせてやるぞ。」</p> <p>杜子春はかう嚇(おど)されても、やはり返答をしずにゐました。</p> <p>「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ、好いと思つてゐるのだな。」</p> <p>閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚きました。</p> <p>「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまへ。」</p> <p>鬼どもは一斉に「はつ」と答へながら、鉄の鞭(むち)をとつて立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未釈(みれんみしゃく)なく打ちのめしました。鞭はりうりうと風を切つて、所嫌はず雨のやうに、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、——畜生になつた父母は、苦しうに身を悶(もだ)えて、眼には血の涙を浮べた儘、見てもみられない程嘶(いなな)き立てました。</p> <p>「どうだ。まだその方は白状しないか。」</p> <p>閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階(きざはし)の前へ、倒れ伏してゐたのです。</p> <p>杜子春は必死になつて、鉄冠子の言葉を思ひ出しながら、緊(かた)く眼をつぶつてゐました。するとその時彼の耳には、殆(ほとんど)声とはいへない位、かすかな声が伝はつて来ました。</p> <p>「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰(おっしゃ)つても、言ひたくないことは黙つて御出(おい)で。」</p> <p>それは確に懐しい、母親の声に違ひありません。杜子春は思はず、眼をあきました。さうし</p>	<p>“小子，你为何坐在峨嵋山上？快从实招来！不然，这次就要让你的父母尝尝痛苦的滋味了。”</p> <p>杜子春虽如此被恐吓著，但仍不出声。</p> <p>“你这个不孝子！你为了自己的立场，就忍心让父母承受痛苦吗？”</p> <p>阎罗王怒声大骂，声音洪亮得森罗殿要崩坍似的。</p> <p>“打！喽罗们！把这两匹畜牲打得肉烂骨碎！”</p> <p>众喽罗们齐声道“是”，手执铁鞭站起来，毫不留情地从四面八方鞭打起两匹马。</p> <p>铁鞭“嘶”、“嘶”地鸣响著，如雨一般纷纷落在两匹马身上，</p> <p>把马打得皮开肉绽。马</p> <p>……沦落成畜牲的父母，痛苦地扭曲著身子，血泪盈眶，惨不忍睹地嘶叫著。</p> <p>“怎样？你还不肯招认吗？”</p> <p>阎罗王暂时让众喽罗们停止鞭打，再一次催促杜子春回答。</p> <p>这时，两匹马已经肉烂骨碎，奄奄一息地倒卧在台阶之前。</p> <p>杜子春紧闭著双眼，拼命想著铁冠子的话。这时他耳边传来微弱的、勉强可听出是声音的唏嘘：</p> <p>“你不用担心，不管我们会变得怎样，只要你能幸福，那是最好不过的。大王再怎么逼，只要你不愿开口，你就沉默著吧。”</p> <p>这声音，确实是那久违的母亲的声音啊！杜子春情不自禁睁开眼。</p>
---	--

て馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顔へ、ぢつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色(けしき)さへも見せないのです。大金持になれば御世辞を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ有難い志でせう。何といふ健気な決心でせう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転(まる)ぶやうにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一声を叫びました。……

6 その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでゐるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になつた所が、とても仙人にはなれはすまい。」

片目眇(すがめ)の老人は微笑を含みながら言ひました。

「なれませんが、なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反(かえ)つて嬉しい気がするのです。」

杜子春はまだ眼に涙を浮べた儘、思はず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、黙つてゐる訳には行きません。」

「もしお前が黙つてゐたら——」と鉄冠子は急に嚴(おごそか)な顔になつて、ぢつと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。——お前はもう仙人になりたいといふ望も持つてゐまい。大金持になることは、元より愛想があつ

他看见一匹马无力地倒在地上，悲切地深深凝望著他的脸。

母亲在这种水深火热的痛苦中，仍眷顾著儿子的心，對於被鞭打的事，完全没有一丝怨怼之情。这和那些当你是大富翁时，便来阿谀你，当你是一文不名的穷光蛋时，便不理睬你的世人比起来，是多么难得的温情，又是多么坚韧的决心呵！杜子春忘了老人的警戒，蹣跚奔至老马身边，双手环抱著濒死的老马脖子，泪珠涔涔地喊了一声：

“娘！”……

6 杜子春被自己的声音惊醒，回过神来，才发现自己仍然沐浴著一身夕晖，呆然地立立在洛阳西门下。烟霞渺渺的天空，白色的月牙，川流不息的车水马龙……一切都和未到峨嵋山时一样。

“怎么样？你即使成为我的徒弟，也很难成为仙人吧？”独眼老人微笑著。

“不能。不过虽不能成为仙人，我反而庆幸自己没有成为仙人。”

杜子春眼里依然噙著泪水，冲动地握住老人的手：

“即使能成为仙人，我在那地狱的森罗殿之前，看著父母苦捱著鞭打，我也是无法保持沉默的。”

“如果你还保持沉默的话……”铁冠子突然很严肃地凝望著杜子春：

“如果你还保持沉默的话，我打算当下就断绝你的命根子……

你大概已经不想再当神仙了吧。至於大富翁，你也早就厌膩了。

<p>きた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな。」</p> <p>「何になつても、人間らしい、正直な暮らしをするつもりです。」</p> <p>杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩(こも)つてゐました。</p> <p>「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇はないから。」</p> <p>鉄冠子がかう言ふ内に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、</p> <p>「おお、幸(さいわい)、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓(ふもと)に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだらう。」と、さも愉快さうにつけ加へました。</p> <p>(大正九年六月)</p> <p>底本：「現代日本文学大系 43 芥川龍之介集」筑摩書房 1968(昭和43)年8月25日初版第1刷発行</p> <p>入力：j.utiyama 校正：野口英司 1998年5月20日公開</p>	<p>那么，你以后想当什么呢？”</p> <p>“不管当什么，我都打算做个真实的人，过著真正的生活。”</p> <p>杜子春的声音，充满一种至今为止从未出现过的爽朗口吻。</p> <p>“好，不要忘记你现在说的这句话。那，从今天起，我不会再跟你见面了。”</p> <p>铁冠子一边说著，一边跨开脚步，然后突然又停住脚步，回头望著杜子春，彷彿不胜愉快地抛下一句：</p> <p>“喔，对了，我刚想起，我在泰山南麓有一间房屋。那房屋和田地都一起送给你，你马上去住吧。现在这个时节，那屋子四周，大概已开满了桃花吧！”</p> <p>—大正九年(1920)六月—</p> <p>MIYA 译</p>
--	---

唐の都は長安(西安)です。私は洛陽の西の門にも行きましたが、洛陽文化局で「芥川龍之介の“杜子春”を知っていますか」と聞くと局長は「知らない」と答えました。そこで、中国語の文章をみせると、「凄いな」と言いました。

(「聞く中国語」2011年1月号 発行元；日中通信社)によると、最近、北京の小学生 90%が学級委員の希望者で、70%が学級委員長を希望しています。人を管理することで威厳をもちたいという“拝権主義”が芽生えてきているようです。

「聞く中国語」は私の独学の教科書です。過去9年分が庭の書齋にあります。

2010/10/15 2010/11/23